

『SとNの間の香り』(再演)

[1 - 1]

授業が始まる前の教室。

制服姿の森本、杉尾、宇野、離れたところに同じく制服姿の原がいる。

森本、杉尾、宇野の髪は三つ編みになっている。

一方原は髪を短く切り、終始うつむき加減で他の誰とも関わる様子が無い。

教室の扉から、坂入が入ってくる。

他の人と同じ制服を着ているが、長い髪はおろしたままである。

〔登場人物〕

坂入晴子

原穂花

内藤杏子／母

森本舞

宇野良枝

杉尾千尋

坂入 あ、1組って、ここであってますか？

宇野 はい、そうですけど……。

坂入 ああ、先生は、

森本 そのうち来るんじゃない？

坂入 あ、このクラスに行け、と言われて。

杉尾 ……転校生？

坂入 あ、はい、そうです。

森本 え、転校生なんて初めてじゃない？

杉・宇 確かに！

森本 名前は？

坂入 坂入晴子です。

森本 私、森本舞。

杉尾 杉尾千尋です。

宇野 宇野良枝です。

原は黙っている。

坂入 えーっと、(確認しながら) 森本さん、杉尾さん、宇野さん……。

内藤が教室に入ってくる。

内藤もまた髪を三つ編みにしている。

森本 あ、あと、内藤さん。

坂入 (内藤の顔をじっと見つめながら) えっ……。

内藤 あら、どなた？

森本 転校生、聞いてた？

内藤 初耳ね。お名前は？

坂入 晴子です。

内藤 内藤杏子です。

坂入 内藤……。

内藤 何か……？

坂入 ……いえ、何でもありません。

内藤 (坂入の髪を見て) あ、リボン。

坂入 えっ？

内藤 制服と一緒にもらったでしょ、リボン。

坂入 ああ、これですか(ポケットからリボンを取り出しながら)。

内藤 髪、三つ編みしないといけないのよ。

坂入 あ、そうなんです。

宇野 (空いた椅子を指し) 座って、やってあげる。

坂入 あ、ありがとうございます。

宇野と杉尾、坂入の髪を三つ編みにする。

内藤 どこから来たの？

坂入 東京。

森本 え、東京！

内藤 こんな田舎じゃ退屈だと思っただけ。

坂入 いえいえ。

杉尾 まあ、学校の外はお休みの日しか出られないから。

坂入 あ、そうなんですか？

杉尾 本当に何も聞いてないの？

坂入 はい、今朝ここに来たばかりなんで……。

杉尾 そっか。

宇野 日曜しか出られないの、外。

杉尾 まあ、出たところで何にもないんだけどね。

森本 駅前のコンビニなんて、夜の8時には閉まっちゃうんだから。

坂入 ああ……。

宇野 でも、ここにいれば不便なことは全然無いから、別に大丈夫なんだけど。

森本 ねえ、東京ってコンビニ24時間開いてるでしょ？

坂入 まあ、ほとんどは。

森本 すごいなあ……。

坂入 行ったことないんですか？

森本 え？

坂入 東京。

森本 ないよないよ、だって私達ずっとここだもん。

坂入 そうなんですか……。

内藤 あ、別に色々気使わなくていいのよ、今日から同じクラスなんだし。

坂入 あ、はい。

杉尾 そのうち慣れるから。

坂入 はい。

始業のチャイムが鳴る。

内藤 じゃあ、そろそろ授業開始ですね。
森杉宇 はーい。

坂入の三つ編みを結び終え、全員が席につく。

内藤、森本、杉尾、宇野が去った授業後の教室。
坂入、教室に残った原に声をかける。

坂入 あの、

原、呼び止められ、無言で坂入を見る。

坂入 あ、
原 なに？

坂入 いや、私にしか見えてないのかと思って。

原 どういうこと？

坂入 なんか、座敷わらしみたいなの……。

原 勝手に人のこと殺さないでくれますか？

坂入 いや別にそういうわけじゃないんです、すみません。
で、何ですか？

坂入 え？

原 声かけてきたの、そっちでしょ。

坂入 あ、挨拶してないと思って、このクラスなんですよ？

原 だから授業来てたんですよ？

坂入 そうですよ……。

原 坂入晴子さん。

坂入 はい。

原 原穂花です。

坂入 あ、よろしくお願ひします。

原 よろしくお願ひします。

坂入 原さんも、ずっとここに？

原 んーん、私も転校。

坂入 え、でも、さつき森本さんとかが転校生来るのは初めてって……。

原 どうせ忘れてるの。今日一日で私がどれだけ座敷わらししてるかわかったでしょう？

坂入 ええ、まあ。

原 ここことは？何か聞いた？

坂入 いや、まだ何も。

原 やっぱり何も説明されてないんだ。

坂入 朝、家から車でここまで連れてこられて、そのまま制服渡されて、教室

原 室行けって言われて……。

坂入 まあそうでしょうね。

原 原さんも、そうでしたか？

原 そんな感じ、だったかな……。

坂入 はあ……。

原 ま、頑張つて。

坂入 あ、ありがとうございます。

原、教室から去る。

内藤、入れ替わりで教室に現れ、

「1・2」

内藤 坂入さん、

教室。

坂入 はい。

みんながいるところに内藤がやってくる。

内藤 寮の中、案内しますね。

坂入 あ、ありがとうございます。

内藤 おはようございます。

森杉宇 おはようございます。

内藤 坂入さん、おはよう。

坂入 おはようございます。

内藤 あのー、先生から春学期の合唱曲を決めるように言われたんです

坂入 ここには、ベッド、机、電子レンジ、冷蔵庫、お風呂とトイレが

森本 新しいのやるのもなあ、音取りするの面倒だし。

あります。壁も床も真っ白、見渡す限り冷ややかに広がっていて、少

杉・宇 確かに。

し目が痛くなりそうです。今日からここが、私の部屋。今朝、私は

迎えに来た真っ黒い車に乗って、この学校へ来ました。私が家を

出るとき、一緒に住んでいたおばあちゃんは仏壇に手を合わせ、私

宇野 男声が厄介だよね、わりと。

には何も言わずにお線香をじっと見ていました。だから、この何も

ない部屋でも、私の髪からは少しお線香の香りがするような、そんな

杉尾 (男声の真似で) われらー、

気がします。

森本、杉尾、宇野、笑い出す。

坂入、自分の髪の毛の匂いを嗅ぐ。

内藤 男声が無くても歌えるのがいいんじゃない？

坂入 春、もう桜は散って、花びらが汚くアスファルトにこびりついて

いました。

森本 『COSMOS』！

宇野 あ、あれ、地声になりやすいからあんまり……。

杉尾 『モルダウ』！

森本 暗い。

杉尾 ですよ。

森本 え、じゃあ『明日へ』が良い。

杉・宇 あー！

内藤 坂入さん、『明日へ』って知ってます？

坂入 いや、ちょっと、わかんないですね。

森本 大丈夫大丈夫、そんな難しくないのでね。

坂入 あ、はい。

内藤 じゃあ、多数決。今学期の合唱曲は『明日へ』で良い人、挙手してください。

原以外が手を挙げる。

内藤 ありがとうございます、賛成多数で決定です。じゃあ、先生から譜面をもらって

くるので、ちょっと待っててください。

森杉宇 はい。

内藤、教室から出ていく。

森本 パートは？

坂入 え？

森本 アルトとかソプラノとか。

坂入 ああ、アルトです。

森本 じゃあ、(坂入を指差し)アルト、(杉尾、自分を順に指差し)ソプラノ、ソプラノ、でバランスいいね。

坂入 内藤さんは？

森本 内藤さんはアルト。あと宇野ちゃんが伴奏。

坂入 原さんは？

全員の視線が原に集まる。

原 ソプラノ。

森本 ふーん……。

森本、杉尾、宇野、クスクスと笑い出す。

坂入 あ、ごめんなさい。

原 別に。

内藤、譜面を持って教室に戻ってくる。

森本 おかえりなさい。

内藤 ただいま、はい、譜面回してください。

内藤、譜面を森本に渡し、森本がみんなに配る。原に渡すときのみ乱暴に渡す。

宇野、楽譜を持ってピアノへ。

森本 譜面読める？

坂入 はい。

森本 よかった。

じゃあさっそくやりますけど、坂入さんはとりあえず一度聞きながら譜面を追ってみてください。

坂入 はい。

内藤 宇野さん、お願いします。

宇野 はい。

宇野、ピアノで『明日へ』の伴奏を弾き始める。

森本、内藤、杉尾、立って歌う。
勢いよく歌いだした森本が、激しい音痴。

坂入 歌わないんですか？

原 だめ？

坂入 ……

最後まで歌い終わり、

内藤 こんな感じですね。

坂入 ありがとうございます…。

森本 あ、私ちよっとトイレ。

内藤 はい。

森本、教室から出ていく。

宇野 ……まあ、あんな感じだから気楽に。

坂入 あ、はい。

宇野 本人全然気づいてないんだよね。

杉尾 うちらがどんなに頑張っても、あれが主役になっちゃうから。

坂入 大変ですね…。

内藤 もー、いない人のこと、陰で色々言わないの。

杉・宇 はーい…。

宇野 まあどうせ、見せるって言ったって先生だけだし、いいんだけどねー。

坂入 一応発表があるんですね。

宇野 7月にね。

杉尾 あの声で『モルダウ』歌ってほしかったなあ。

宇野 絶対笑って伴奏間違えるよー。

宇野と杉尾、くすくすと笑う。

そこへ、森本が紙飛行機を持って戻ってくる。

森本 見てこれ、

杉尾 何それ、

森本 紙飛行機。教室の入口に落ちてたの。

森本、紙飛行機を開く。

森本 「内藤杏子さま」って。

内藤 えっ、

内藤、森本から紙飛行機を受け取り、内側に書かれた手紙を
読み上げる。

内藤 「はじめまして。突然のお手紙、そしてそれをこんなふうに折って

しまったこと、どうぞお許し下さい。あなたをいつか一目見た時

から、ずっと恋焦がれていました。昨晚あなたの姿が部屋の窓から

見えた時、遂にいてもたってもいられなくなり、こうして筆をとっ

た次第です。私の顔も名前もあなたはご存知ないでしょうが、もし

よろしければお返事をいただけると嬉しいのです。お手紙は紙飛行機

の形に折って、毎週日曜の夜、あなたの部屋の窓から校庭に向かっ

て力いっぱい投げれば、必ず私に届きます。お返事は次の日曜の夜、

あなたの部屋に送りますので、必ず窓を開けておいて下さい。では、

お手紙お待ちしております。Sより」

森本 ……Sって誰？

内藤 知らない。

森本 え、これ、ラブレター？

杉・宇 ですよね！

森本 すごーい！

内藤 いや……

森本 お返事出すの？

内藤 うーん……

森本 いや、絶対出したほうがいいって、ね！

杉・宇 もちろん！

森本 せっかく送ってくれたわけだし。

内藤 そうですね……

森本 いいなあ、ねー。

杉・宇 ねー。

森本、杉尾と宇野を連れて教室を出て行く。

内藤、手紙をじっと見つめ、続いて教室を出て行く。

椅子には、みんなが使っていた楽譜が置いてあり、原がそれを集める。

坂入 あの、さっきはごめんなさい。

原 何が？

坂入 いや、何か……

原 別にあなたが悪いわけじゃないし。

坂入 歌わないんですか、いつも。

原 昔はちよっと歌ったけど。

坂入 ああ……。あの、さっきのラブレター、誰からなんでしょうね。

原 さあ……。っていうか、部屋にいるところ見てたとか、ちよっと気持ち悪い。

坂入 まあ……。でも、ここまで紙飛行機届くなんて、すごいですよね。

原 航空工学の勉強でもしてるか、よっぽどの怪力か。

坂入 ああ、なるほど！

二人、顔を見合わせ少し笑う。

原 ねえ、もう学校の外、出た？

坂入 え？

原 日曜日。

坂入 まだ一度も。

原 ……行ってみる？

坂入 あ、はい。

原 一人じゃ何もわからないでしょ、どうせ。

坂入 あ、ありがとう。

坂入 ということで、日曜日。私は原さんの案内で学校の外に出てみました。この町には小さな商店と郵便局があつて、あとコンビニ、でも夜の8時には閉まります。というか、どのお店も早くに閉まってしまふので、夜の町はきつと真っ暗。それから、

原 あれは発電所。

坂入 そんなのあるんだ。

原 あの山一個、発電所なの。

坂入 でかい……

原 私の親、あそこで働いてるの。

坂入 あ、だからここに？

原 よくわかんないけど、忙しいからじゃない？別に一緒に住んでたつて、そんなに迷惑かけませんけど、っていう。何が忙しいのかもよく分かんないし。

坂入 まあ、親の仕事細かくわかる子供なんて、そんなにいないよ。

原 坂入さん家は？

坂入 私の家？

原 そう。

坂入 私のお母さんは何かを研究してたんだけど、いなくなっちゃって、

お父さんは飛行機作ってたんだけど、いなくなっちゃって。

いなくなすぎでしょ。

坂入 いや、本当に。だから最後はおばあちゃんと住んだ。

原 へえ。

坂入 ……あの、煙突2本あるのに1本しか使っていないの？

原 ああ、煙？

坂入 うん、出てないから。

原 ああ、たまに使ってるみたいだけど、電気足りない時とか？

坂入 なるほど。

原 この町じゃクリスマスとか全然関係ないけど、東京とか、すごい

でしょ？

坂入 まあ、そうだね。

原 作ってるのはこつちで、使うのは向こうっていう。

坂入 うん。

原 何なんだろうね。

坂入

その夜、私は部屋の窓を開けて、内藤さんの部屋をこっそり見ていました。しばらくすると内藤さんも窓を開けて、紙飛行機を力いっぱい投げました。内藤さんの思いを乗せた紙飛行機はそのまま真っ逆さまに下へと進路を取り、ポトツ、地面に落ちました。

坂入、紙飛行機を折る。

坂入

「Sさま。はじめまして、突然のお手紙失礼いたします。この前、内藤さんと同じクラスに転校してきた坂入晴子といいます。内藤さんの手紙に、日曜の夜校庭に向かって紙飛行機を投げればお手紙が届くと書いてあったので、私も書いてみました。もし本当に届いたら、とても嬉しいです。紙飛行機にお手紙を書くなんて素敵ですね。どうやって私達のことを見ているのですか？突然この学校に来て、知り合いも少ないので、もしよければお話相手になってください。お返事、お待ちしています。坂入晴子」

お父さんが昔教えてくれたように、紙飛行機を水平に押し出すと、そのまま真っ直ぐ綺麗に飛んで、闇の中に消えていきました。

坂入、紙飛行機を窓の外へ投げる。

その日の夜、坂入の部屋。

教室にお昼休みのチャイムが鳴る。お昼ご飯の時間。

森本 杉ちゃんまーだー？

杉尾 はいはいちよつと待ってねー！

杉尾、お弁当を持ってきて少し離れたところから宇野に投げる。

杉尾 宇野ちゃんキャッチ！

宇野 はい！坂入さーん！

坂入 えっ？

宇野、キャッチしたお弁当を坂入に投げ、それを坂入がキャッチする。

森本 坂入ちゃん、こつち！パス！

坂入 えっ、ああ、

坂入、森本にお弁当を投げる。

森本 ナイスパス！あー、今日も美味しくなさせ・・・。

森本、蓋を開けたお弁当を原に投げつける。

お弁当の中身が床に散らばる。

原はじつと森本を見つめている。

坂入 えっ・・・。

内藤、教室にやってくる。散らばったお弁当の中身を見て、少し驚いたような、困ったような顔をしている。

森本 あ、内藤さん、私のお昼ご飯、手滑らせて落としちゃった。

内藤 あー・・・じゃあ、私の分少しあげますね。

森本 ごめんなさい。

宇野 私のもちよつとあげる。

森本 ありがとう。

内藤 今日は外でご飯食べましょうか。

森本 うん。

坂入 あの、

内藤 坂入さんも行きますか？

坂入 いや、いいです・・・。

森本 (小声で) 坂入ちゃん、ナイスパス。

森本、内藤の手を引いて外へと出ていく。杉尾と宇野もあとに続く。

原、ぶつけられて飛び散ったお弁当を片付ける。

坂入 ・・・・ごめんなさい。

原 いいよ別に。

坂入 びっくりしちゃって私、何もできなくて、

大丈夫だから、慣れてるから。

坂入 ごめんなさい・・・。

原 あいつ、わざわざ自分の弁当投げるんだよ？どんだけ痩せたいん

だよ、っていう。

坂入

坂入も片付けを手伝う。ハンカチで原の服や髪を拭く。

坂入 あの前から思ってたんだけど、

原 何？

坂入 何で原さんだけ髪短いの？

原 ああ、自分で切った。

坂入 え、それいいの？

原 いや、ダメダメ。でも切ったもんは戻ってこないから、仕方ないって

こと。

坂入 ああ……。

原 まあ、先生に怒られるとしても、あれと一緒にもう飽きた。

原、お弁当箱を持って教室から出ていく。

その週末の日曜、坂入の部屋。

坂入 この前、原さんを拭いたハンカチを洗い忘れていて、そつと匂いを

嗅いでみると、ちよつとすっぱいお弁当の香りがして。とつさに

気持ちが悪くなった私は、窓を開けて外の空気を吸いました。その時、私の頭の上を何かが飛んでいきました。紙飛行機です。

坂入の頭の上を紙飛行機が飛んでいき、落ちる。

坂入、それを拾って読み上げる。

「坂入晴子さま。初めまして、Sです。お手紙ありがとうございます。まさか、内藤さんに送った手紙がみんなの前で読み上げられるとは。全くの誤算で恥ずかしいです。でも、こうしてあなたからお便りをいただけたので、それもまた良しとしましょう。学校生活に不便はありませんか？小さな学校なので窮屈かもしれませんが、出来るだけ居心地のいい生活になることをお祈りしています。文通くらいしか力にはなれませんが、ぜひ色々なお話を聞かせてください。最後に、他の人にはこの手紙のことはくれぐれも内緒にしてください。もちろん内藤さんにも。では、お返事お待ちしております。Sより」

教室。

森本 今日は何曜日でしょうか？

杉・宇 月曜日。

森本 ということは、

森本、杉尾、宇野、内藤を見つめる。

内藤 えっ？

森本 昨日の夜、お返事来た？

内藤 ああ、はい。

森本 見せて！

内藤 え、いや、ちよつと……。

森本 ねえ、なんで最近見せてくれないの？

内藤 人のお手紙を勝手に見せるわけにはいきませんから。

森本 えー、前は見せてくれたじゃん……。

内藤 森本さんだって、人にこっそりお手紙出したのに、それが誰かに

読み上げられるの、嫌でしょ？

森本 そうだけど、えー、楽しみにしてたのに、ね。

杉・宇 うん。

森本 私にもお手紙、来ないかなあ。

杉尾 「森本舞さま、明日あなたを迎えに参ります。」

森本 いやいやいやいや、ないないない。

宇野 杉尾ちゃんそれ誘拐。

杉尾 でも、「ひと目見た時から恋焦がれていました」だよ？

森本 (内藤に向かって) え、そんなこと言われたりするの？

内藤 いや、あるわけないじゃないですか、だいたい名前も知らない相手ですよ？

森杉宇 えー……。

内藤 はあ……。

坂入 まあ、とりあえず合唱の練習、しましょう、ね？

坂入、原のほうも見て、

坂入 ね？

原 えっ、

内藤 そうですね。じゃあみなさん、準備。

森杉宇 はーい。

宇野はピアノへ、それ以外の人は合唱の体形に並ぶ。

内藤 今日は、歌詞をはつきり歌うことを心がけていってみましょう。

じゃあ宇野さん、お願いします。

宇野、ピアノで『明日へ』の伴奏を弾き始める。

相変わらず音痴な森本を、みんな横目で見ながら歌っている。

坂入、歌おうとしない原を小突いて歌わせようとし、原は小声でぶつぶつと歌いだす。

曲が終わり、内藤、森本、杉尾、宇野が去った後の教室。

原 ねえ、何で？

坂入 いや、だって、

原 何であなたに強制されなきゃなんないのよ。

坂入 ……

原 私は歌わないって自分で決めてたから歌ってなかったの。

坂入 ……ごめんなさい。

原 謝るぐらいならやめといたほうがいいよ。

坂入 ……

原 ……って言われると、だいたい人間なんて返したら良いかわからなくなるよね。

坂入 まあ……

原 私もそんな本気で怒りたかったわけじゃないの、だから、ごめんって
いうか、ありがとう……

坂入 いや、ううん。

原 私、坂入さん来るまでずっと一人だったから、なんか喋り方とか色々
忘れちゃったかも、はあ……

坂入 そんなことないって、

原 お母さんが歌好きでね、だから私がちゃんと歌ってないの知ったら、
きつと悲しむと思う。

坂入 お母さん……

原 でもここなら授業参観も無いし、お父さんにもお母さんにも会えな
いし、私がこんなになっちゃったのはもう誰にも知られなくて済む
と思うと、寂しいけどホッとするの。

回想。

坂入 お母さんは、背が高く綺麗で、とても優しい人。でも、毎日仕事で

帰りが遅く、帰ってこない日も時々ありました。お父さんは、どんな

に遅い時間でもお母さんの帰りを待って、一緒にご飯を食べていた
のを覚えています。だから、私にご飯を食べるときはいつも一人。

一人分のご飯、一人分のお味噌汁、一人分のおかず。

坂入が中学生くらいの頃のこと。

母(内藤)、紙飛行機を折りながら、

坂入 ねえ、お母さん、
なに？

母 学校で、親の仕事について聞いてきてって言われたんだけど。

坂入 ああ、私のお仕事は、ちょっと教えてあげられないのよね。

母 そうだよね……

坂入 じゃあ、人のことを研究しています、っていうことにしておいて
くれるかしら。

母 わかった。あと、来月の体育祭なんだけど、

坂入 ああ、ごめんなさい、私やっぱ行かれそうにないの。

母 あ、全然いいよ。
いまやってる研究が一段落するまでは休めなくて。お父さんに代わ
りにいってもらうから。

坂入 うん、ありがとう。

母 ごめんね。

坂入、紙飛行機を折りながら、

坂入 「Sさま。お元気ですか？毎日毎日本当に退屈で、無菌室に閉じ込

められたようです。だから今日は窓を開けて、雨の香りを嗅いで

いました。この手紙も雨に濡れて、届く前に字が消えてしまわないかと不安です。ところで、最近内藤さんとはいかがですか？内藤さんが教室で手紙をみんなに見せたがらなくなっただので、勝手に期待しています。内藤さんはとても綺麗で優しい人ですね。実は、私のお母さんによく似ているので、少しドキッとします。でも、何だか恥ずかしいので、この話はSさん以外には内緒です。近頃クラスでは、原さんという子がいじめに遭っていて、何も悪くない彼女を見ているのがとてもつらいです。この前はなんとかしようとして、逆に嫌な思いをさせてしまいました。暗い話ばかりになってしまいすみません。本当は、もうすぐ来る夏が少し楽しみです。では。坂入晴子」

坂入、紙飛行機を飛ばす。

「1・5」

朝、チャイムが鳴り響く教室。
教室に坂入がやってくると、原以外誰もいない。

坂入

おはよう。

原

おはよう。

坂入

・・・みんなは？

原

いないよ。

坂入

えっ、なんで？

原

・・・

坂入

今日、合唱の発表だよね？

原

うん。

坂入

え、二人だけ？

原

うん。

坂入

嘘でしょ？

原

本当だよ。

坂入

なんで？原さん何か聞いている？

原

みんなが私に何か言ってくわけないでしょ。

坂入

いや、うーん、そっか。

原

ほらもうすぐ時間。

坂入

いやいやいや、

原

行くよ。

坂入

二人だよ？

原

私はそのほうがよっぽど楽だよ。

坂入

いや、そういう問題じゃなくて、

原

行くよ。

『明日へ』の伴奏が流れ出す。

なかなか歌わない坂入に原が目配せをし、歌わせる。

最後まで歌い終わった二人。一礼する。

坂入
ねえ、なにこれ。

原
さあ。

坂入
ちよつとよくわかんないんだけど。

原
私もよく、知らない。

坂入
私達だけ残していきなりみんななくなっちゃうことないでしょ。

原
いいよ別に、みんななくなっちゃって。

坂入
ちよつと！

原
・・・

坂入
先生に聞いてくる。

原
どうせ何も教えてくれないよ。

坂入
えっ？

原
教えてくれなかった、誰も、何も。

坂入
前にも、あったの？

原
うん、何度も。

坂入
どういふこと・・・？

原
わからないの。

坂入
その日、山の上にある発電所の、もうひとつの塔から煙がでて、

煙は細く長く、昼と夜の境目の空に消えて行きました。校庭にある幅
跳び用の砂場では、原さんがお線香を焚いていて、ずいぶん遠くから
でもわかるその香りは、おばあちゃんとお別れしたあの朝を思い出
します。

坂入

原、砂場にお線香を立て、手を合わせている。

坂入、自分の髪の毛の匂いを嗅ぐ。

その時、坂入の頭の上を紙飛行機が飛んでいき、落ちる。

坂入、紙飛行機を拾って読み始める。

「坂入晴子さま。今日は綺麗に晴れましたね、もうあつという間に夏
の空です。お手紙、雨で濡れてもしつかりと私のところに届きまし
た。さて、内藤さんについてですが、これは私からもお答えできませ
ん。内藤さんがみんなにお手紙を見せたがらないのと同じく、私も
また、自分のことを話すのはとても恥ずかしいからです。しかし残
念ながら、内藤さんはもういなくなりました。今はただ、
自分の無力さに打ちひしがれるばかりですが、悲しさを嘆くことに
多くの時間を割かせてくれるほど、私やあなたが生きているこの
世界は優しくありません。必ずや、彼女を救います。坂入さんも、
明日からもう一度がんばってください。あなたのこと、
ずっと見守っています。では、また。Sより」

授業が始まる前の教室。

森本、杉尾、宇野、離れたところに原がいる。

坂入、寝坊して髪を結わないまま、教室に駆け込んでくる。教室にいるみんなを見て、

坂入 おはよう、

杉尾 ……転校生？

坂入 ……は？

森本 え、転校生なんて初めてじゃない？

杉・宇 確かに！

坂入 いや、えっ……？

森本 名前は？

坂入 晴子です、あの、

森本 私、森本舞。

杉尾 杉尾千尋です。

宇野 宇野良枝です。

内藤が教室に入ってくる。

森本 あ、あと、内藤さん。

内藤 あら、どなた？

森本 転校生、聞いてた？

内藤 初耳ね。お名前は？

坂入 内藤さん、私です、坂入です、坂入晴子。

内藤 内藤杏子です。

坂入、原のほうを見る。
原はじっと黙っている。

内藤 (坂入の顔を見て) あ、リボン。

坂入 えっ？

内藤 制服と一緒にもらったでしょ、リボン。

坂入 (ポケットからリボンを取り出しながら) ああ、今日珍しく寝坊しちゃって。

内藤 髪、三つ編みしないといけないのよ。

坂入 いや、前にそう……？

宇野 (空いた椅子を指し) 座って、やってあげる。

坂入、恐る恐る椅子に座る。

宇野と杉尾、坂入の髪を三つ編みにする。

原、坂入のことをじっと見ている。

坂入 あの、昨日なんで来なかったんですか？

内藤 ……何のこと？

坂入 いや、昨日の合唱の発表、みんな来なかったじゃないですか。せっかく練習もしたのに、私と原さんに何も言わないで全員休むなんて、どうしてそんなことするんですか？

内藤 ……私達、ずっといましたよ？

坂入 え？

内藤 私達、いつも通りでしたよ、ね？

森杉宇 ね。

坂入 前の学校のことと何か混同してるんじゃない、だから私、転校してきたんじゃない、

森本 え、でも今日初めて会ったよ。

坂入 いやいや、私が来たのは春だつて、

森本 えっと、内藤さんどうしよう、

内藤 坂入さん、とりあえず落ち着いて、

坂入 落ち着いてつて、ちゃんと説明して。

内藤 説明も何も……。

坂入 あーもう、ねえ、原さん！

視線が一斉に原に集まる。

原、申し訳ないような、怯えたような表情で坂入を見つめ返す。

その時、始業のチャイムが鳴る。

内藤 じゃあ、そろそろ授業開始ですね。

森杉宇 はーい。

杉尾と宇野、三つ編みを終え席につく。

内藤、森本、杉尾、宇野が去った、授業後の教室。

原 びっくりした、よね？

坂入 びっくりっていうか、何これ、私転校生じゃないんだけど。

原 うん。

坂入 原さんは？私のことわかる？

原 わかるよ。

坂入 よかった……一人になっちゃうかと思つた……。

原 私もまた一人になっちゃうかと思つてた。

坂入 え？

原 もうずっとこんな感じ。みんな突然いなくなつて、次帰つてくる時には、みんな全部忘れてる。

坂入 ずっと？

原 そうずっと、何度も何度も。もう何回繰り返したか思い出せない。

原、坂入に救いを求めるような目でじつと見つめる。

坂入 大丈夫だよ、ちゃんと覚えてるよ。

原 うん。

坂入 二人いれば、きつと、大丈夫。

原 でも正直、あなたもいなくなっちゃつて、私のことも忘れちゃうかなつて思つてた。

坂入 そんな、忘れないよ！

原 そんなの誰にもわからないよ。

坂入 ……。

原 忘れない、とか、何が本当、とか、そういうのつて証明する方法が無いな、と思つてて。

坂入 うん。

原 例えば、あなたに、私が昨日と同じ私だつて、証明する方法つて無いでしょ？

坂入 いや、それはさ、私のこと覚えてるし。

原 坂入さんの情報を全部知ってる、私と同じ顔の別人、つていう可能性は？

坂入 そんなの、あるわけじゃないじゃん。

原 あるわけない、ことはない。可能性はあるよね。1ミリも無いとは

坂入
言えないと思う。
うーん……。

原、坂入の心臓を指差し、

原
じゃあ、これ、何かわかる？

坂入
えっ、胸？

原
違う、その奥。

坂入
ああ……心臓？

原
本当に？

坂入
えっ？

原
本当にそれ、あなたの心臓？

坂入
そうだよ。

原
証拠は？

坂入
は？

原
その心臓が、本当にあなたのである証拠。

坂入
そんなの、私が生きてるから、これは本当に私の心臓。

原
自分の心臓、見たことある？

坂入
あるわけないじゃん。

原
じゃあ機械かもしれない。

坂入
そんなわけない。

原
自分の心臓や肺なんかは本物で、本当にそこにあるかなんて、それこそレントゲンでも撮らなきゃわからないの。レントゲンという証拠に頼らなきゃ、私の心臓は本物かわからない。

坂入
……。

原
そのレントゲン写真だって、本物かわからないしね。

坂入
そんなにもかんでも疑ったら、もう生きていけないよ。

原
そうなの。だから、坂入さんは私のことちゃんと忘れてないし、これ

からもずっと覚えてる、ね？

坂入
え、うん、だから覚えてるって言ったじゃん。

原
私もそう思う、ってこと！

坂入
……あー……。

教室。

みんながいるところに内藤がやってくる。

内藤 おはようございます。

森杉宇 おはようございます。

内藤 坂入さん、おはよう。

坂入 おはようございます。

内藤 あのー、先生から秋学期の合唱曲を決めるように言われたんですけどど・ど・ど、何かやりたい曲とかがありますか？

森本 新しいのやるのもなあ、音取りするの面倒だし。

杉・宇 確かに。

内藤 『大地讃頌』は？

森本 えー、あれなあ・・・。

宇野 男声が厄介だよ、わりと。

杉尾 (男声の真似で) われらー、

森本、杉尾、宇野、笑い出す。

内藤 男声が無くても歌えるのがいいんじゃない？

森本 『COSMOS』！

宇野 あ、あれ、地声になりやすいからあんまり・・・。

杉尾 『モルダウ』！

森本 暗い。

杉尾 ですよ。

森本 え、じゃあ『明日へ』が良い。

杉・宇 あー！

内藤 坂入さん、『明日へ』って知ってます？

坂入 はい、知ってます。

内藤 よかった。じゃあ、多数決。今学期の合唱曲は『明日へ』で良い人、挙手してください。

原以外の全員が手を挙げる。

坂入、原に近寄り、原の手を掴んで挙げようとする。

原 えっ、何？

坂入、無言で頷く。

内藤 ありがとうございます、賛成多数で決定です。じゃあ、先生から譜面をもらってくるので、ちょっと待っててください。

森杉宇 はい。

内藤、教室から出ていく。

森本 パートは？

坂入 え？

森本 アルトとかソプラノとか。

坂入 ああ、アルトです。

森本 じゃあ、(坂入を指差し)アルト、(杉尾、自分を順に指差し)ソプラノ、ソプラノ、でバランスいいね。

坂入 内藤さんは？

森本 内藤さんはアルト。あと宇野ちゃんが伴奏。

坂入 あと、原さんもソプラノ、だよな？

宇野 はい。

全員の視線が原に集まる。

原 ……うん。

森本 ふーん……。

宇野、ピアノで『明日へ』の伴奏を弾き始める。
森本、内藤、杉尾、立って歌う。
勢いよく歌いだした森本が、激しい音痴。
最後まで歌い終わり、

森本、杉尾、宇野、クスクスと笑い出す。

内藤 こんな感じですね。

原 ねえ、

坂入 ありがとうございます……。

坂入、原をひっぱたく。

森本 あ、私ちよっとトイレ。

内藤、譜面を持って戻ってくる。

森本、教室から出ていく。

森本 おかえりなさい。

宇野 ……まあ、あんな感じだから気楽に。

内藤 ただいま、はい、譜面回してください。

坂入 あ、はい。

内藤、譜面を森本に渡し、森本がみんなに配る。原に渡すときのみ

杉尾 本人全然気づいてないんだよね。

乱暴に渡す。

坂入 うちらがどんなに頑張っても、あれが主役になっちゃうから。

宇野、楽譜を持ってピアノへ。

杉尾 いや流石に、ずっとあれだから……。

坂入 でも、正直歌いづらくないですか？

森本 譜面読める？

宇野 まあ……。

内藤 多分、自分の音が聞こえてないのよね。

坂入 よかった。

坂入 原さん、何か策ないかな。

内藤 じゃあさっそくやりますけど、坂入さんも一緒に歌えそうですか？

原 え、私？

坂入 はい。

坂入 うん。

内藤 じゃあ宇野さん、お願いします。

原 え……ちよっと、考えます……。

そこへ、森本が紙飛行機を持って戻ってくる。

森本 見てこれ、

杉尾 何それ、

森本 紙飛行機。教室の入口に落ちてたの。

森本、紙飛行機を開く。

森本 「内藤杏子さま」って。

内藤 えっ、

内藤、森本から紙飛行機を受け取り、内側に書かれた手紙を読み上げる。

内藤 「はじめまして。突然のお手紙、そしてそれをこんなふうに折って

しまったこと、どうぞお許し下さい。あなたをいつか一目見た時

から、ずっと恋焦がれていました。あなたが振り向いてくれるまで、

何度でも何度でも、こうしてお手紙を送り続けるつもりです。私の

顔も名前もあなたはご存知ないでしょうが、もしよろしければお返

事をいただけると嬉しいです。お手紙は紙飛行機の形に折って、

毎週日曜の夜、あなたの部屋の窓から校庭に向かって力いっぱい

投げれば、必ず私に届きます。お返事は次の日曜の夜、あなたの部屋

に送りますので、必ず窓を開けておいて下さい。では、お手紙お待ち

しております。Sより

森本 ……Sって誰？

内藤 知らない。

森本 え、これ、ラブレター？

杉・宇 ですよね！

森本 すごーい！

内藤 いや……

森本 お返事出すの？

内藤 うーん……

森本 いや、絶対出したほうがいいって、ね！

杉・宇

森本 もちろん！

森本 せっかく送ってくれたわけだし。

内藤 そうですね……

森本 いいなあ、ねー。

杉・宇 ねー。

森本、杉尾と宇野を連れて教室を出て行く。

内藤、手紙をじっと見つめ、続いて教室を出て行く。

椅子には、みんなが使っていた楽譜が置いてあり、原がそれを集める。

原 ねえ、何なの今日。

坂入 え？だって、別にうちらまで同じことする必要ないでしょ？

原 そうだけど、

坂入 原さんだって、

坂入、自分の三つ編みをいじってみせる。

原 ああ、まあね。

坂入 だからいいの。

原 ……それにしても、Sさん、しごといね。

坂入 手紙が届くのも、毎回なの？

原 あれはこの前の春から。

坂入 へえ……。

その週の日曜日、坂入の部屋。

坂入 日曜の夜、私は部屋の窓を開けて、内藤さんの部屋をこっそり見ていました。しばらくすると内藤さんもやつぱり窓を開けて、やつぱり紙飛行機を力いっぱい投げました。内藤さんの思いを乗せた紙飛行機はやつぱりそのまま真つ逆さまに下へと進路を取り、ポトツ、やつぱり地面に落ちました。

坂入、紙飛行機を折る。

坂入 「Sさま。とても不思議で、居心地の悪い毎日でした。私のことを覚えてるのはクラスで原さんだけ、原さんのことを覚えているのも、もちろん私だけ。まるで、私達だけが世界にぼっかり取り残されたようです。窮屈な教室は私をどんどん心細くさせますが、私が来るまでこれにずっと一人で耐えていた原さんのことを思えば、二人いるというだけで心強くも思えます。また同じような毎日が始まるということとは、退屈でもあり、できなかつたことをやり直せる、ということでもあります。この日々がどれだけ続くのかは分かりませんが、なんとかここで、生きていきたいと思えます。Sさんも、今度こそ内藤さんと結ばれますように。坂入晴子」

坂入、紙飛行機を窓の外へ投げる。

[2 - 3]

教室にお昼休みのチャイムが鳴る。お昼ご飯の時間。

森本 杉ちゃんまーだー？

杉尾 はいはいちよつと待ってねー！

杉尾、お弁当を持ってきて少し離れたところから宇野に投げる。

杉尾 宇野ちゃんキャッチ！

宇野 はい！坂入さーん！

坂入 あつ、

宇野、キャッチしたお弁当を坂入に投げ、それを坂入がキャッチする。

……。

森本 坂入ちゃん、こつち！パス！

坂入、キャッチしたお弁当をじつと見つめる。

森本 ねえ、

坂入 ……はい。

坂入、少し考えてから森本にお弁当を投げる。

森本 ナイスパス！

坂入、原の近くに素早く回り込み、

坂入 森本さん、こつち！

森本 えっ？

坂入 パス！

森本 あ、はい。

森本、坂入にお弁当を投げる。

坂入 ナイス！

坂入、お弁当を開き、

坂入 今日も、美味しそうだね。

原 ……うん。

内藤、教室にやってくる。みんなの様子をみて、

内藤 あら、どうしました？

坂入 なんでもないです。お弁当のおかず、何かなーって気になっちゃって。

内藤 ああ、今日はなんですか？

内藤、坂入の持つお弁当を覗き込み、

坂入 えっと、ご飯、卵焼き、唐揚げ、プチトマト、ブロッコリー。

内藤 美味しそう。じゃあ、よかったら、今日は外でご飯食べましょうか。

森本 あ、うん……。

内藤 坂入さんも行きませんか？

坂入 はい、あ、あの、原さんもいいですか？

内藤 もちろん。

坂入 じゃあ、原さんも。

原 うん。

内藤達、外へ出ていく。

原 坂入さん、ナイスキャッチ。

坂入、小さくガッツポーズ。

校舎の外。

6人が思い思いに座ってお弁当を開ける。

内藤 いただきます。

全員 いただきます。

森本、冷えて固くなったお米を箸で持ち上げて、

森本 仏壇のご飯じゃないんだからさー！。

内藤 まあ、よく噛めば美味しくなるから。

宇野 っていうか、もうちょっとおかずの種類増やしてほしい。

森本 今週この卵焼き、もう3回も食べてるからね。

杉・宇 本当に！

杉尾　しかもお米の量少ないし。

森本　私、ちよūdただけ。

杉尾　ですよね。

坂入　私もちよūd少ないかも。

杉尾　あ、ですよねー！

原　あの・・・誰か、唐揚げ好きな人いませんか？

森本、無言で手を挙げる。

原　食べませんか？

森本　あ、食べる・・・。

原　ありがとうございます。

森本　え？

原　え？

森本　何が？

原　え、食べてくれて。

森本　ああ・・・じゃあ私も、どうも。

原、森本に唐揚げをあげ、森本がそれを食べる。

坂入　ちよūdと脂っこいけど味が染みてて美味しいからあげ、よく噛めば

ちよūdと味がするご飯、卵焼きはほんのり甘くて、私のお父さんが
作っていたしよūdばい卵焼きとは大違い。

坂入、お弁当の香りを嗅ぎ、そつとお弁当をしまつて、ハンカチ
で口を拭く。

坂入

その週の日曜の夜。

坂入のもとに紙飛行機が届き、それを拾つて読み上げる。

「坂入晴子さま。振り出しに戻つた時間が、少しずつ、そして前にも
増して進んでいるように感じます。クラスの居心地はあと一歩、と
いうところでしょうか？お互い、粘り強くやつていきましょう。そう
いえば、これは内緒話ですが、いなくなる前の内藤さんもクラスの
ことで悩んでいたようでした。彼女がいつかどこかで、今のクラスを
見て報われることを願つてやみません。退屈な日々を退屈せずに
生きることは、何よりもそう強く願う心が大切ですよ。と、私がこんな
ことを言う前に、あなたは賢い人ですから、よくわかっているでしょ
う。では、また。Sより」

教室。

森本 今日は何曜日でしょうか？

杉・宇 月曜日。

森本 ということは、

森本、杉尾、宇野、内藤を見つめる。

内藤 えっ？

森本 昨日の夜、お返事来た？

内藤 ああ、はい。

森本 見せて！

内藤 え、いや、ちよっと……。

森本 ねえ、なんで最近見せてくれないの？

内藤 人のお手紙を勝手に見せるわけにはいきませんから。

森本 えー、前は見せてくれたじゃん……。

内藤 森本さんだって、人にこっそりお手紙出したのに、それが誰かに

読み上げられるの、嫌でしょ？

森本 そうだけど、えー、楽しみにしてたのに、ね。

杉・宇 うん。

森本 私にもお手紙、来ないかなあ。

杉尾 「森本舞さま、明日あなたを迎えに参ります。」

森本 いやいやいやいや、ないないない。

宇野 杉尾ちゃんそれ誘拐。

杉尾 でも、「ひと目見た時から恋焦がれていました」だよ？

森本 (内藤に向かって) え、そんなこと言われたりするの？

内藤 いや……いやいや、え、そ、そんな、あるわけないじゃないですか、

(坂入に向かって) ねー？

坂入 え、私に聞かないでくださいよ。

内藤 名前だって、ねえ、知らないわけだし？

森本 (杉尾と宇野に向かって) クロだね。

杉・宇 うん。

森本、杉尾、宇野、内藤を取り囲み制服をめくったりして手紙を探す。

内藤 ちよちよちよ、ちよっと！持っていないから！

森杉宇 えー……。

内藤 はあ……。

坂入 まあ、とりあえず合唱の練習、しましょう、ね？

内藤 そうですね。

原 あの、

内藤 はい？

原 音程が取れないとき、自分の音がよく聞こえるようにバケツを被る

といい、つて聞いたことがあって。

宇野 それ、私も聞いたことある。

森本 えー、何それ……。

杉尾 面白そう。

内藤 やってみますか？

森本 えー、

坂入 試しに、ね？

宇野以外、バケツをもって集合する。
宇野はピアノへ、それ以外の人は合唱の体形に並ぶ。

内藤 じゃあ宇野さん、お願いします。

宇野、ピアノで『明日へ』の伴奏を弾き始める。

宇野以外、全員バケツを被る。

相変わらず音痴な森本を、そつとバケツをあげてみんなが見ている。

森本、バケツの効果でいくらかましに歌えるようになるが、歌い

終えた後の顔は絶望そのものである。

内藤、森本、杉尾、宇野がいなくなったあとの教室。

坂入 バケツって……。

原 いや、私が前にいた学校、音痴厳禁だったの。で、音痴の子はみんな

音楽の先生にバケツ被らされてたんだよ。

坂入 うそー。

原 本当だって！

二人、笑いあう。

原、バケツを片付けるため教室から去る。

その週末。

坂入 ということで日曜日。私は久々に学校の外へ出てみました。もう

すっかり秋の空、低かった太陽がいまはずいぶん遠くにいます。空気も澄んで、ずつと遠くの金木犀の香りまで漂ってくるような、そんな気がしました。山道を登って、原さんが教えてくれた発電所のすぐ近くまで行ってみると、そこには大きな門があつて、その先には入れません。

回想。

坂入 ねえ、お母さん、

母 なに？

坂入 学校で、親の仕事について聞いてきてって言われたんだけど。

母 ああ、私のお仕事は、ちよつと教えてあげられないのよね。

坂入 そうだよね……。

母 じゃあ、人のことを研究しています、っていうことにしておいて

くれるかしら。

坂入 わかった。あと、来月の体育祭なんだけど、

母 ああ、ごめんなさい、私やつぱり行かれそうにないの。

坂入 あ、全然いいよ。

母 いまやってる研究が一段落するまでは休めなくて。お父さんに代わ

りにいってもらうから。

坂入 うん、ありがとう。

母 ごめんね。

坂入

見上げれば白い塔が2つ、私をじつと見下ろすように立っていて、その冷たさは息が詰まるようでした。周りを見渡すと、もうすべく紅葉が始まりそうな気配。だから私は、みんなを誘って出かけることにしました。

坂入 その次の日曜日。学校を出た私たちは、駅前のコンビニでおにぎりを買って、原さんが前に連れてきてくれた見晴らしのいい丘に登りました。

町を見渡せる丘。

内藤、おにぎりの入ったビニール袋を持って、

内藤 何味にしますか？

森本 (杉尾に)おかか、(宇野に)おかか、(坂入に)しゃげ、(原に)おかか、

(内藤に)内藤さんはしゃげ。しゃげとおかかしが売ってないって

どういうこと……。

杉・宇 確かに。

坂入 まあ、仕方ない。

みんなで輪になって、おにぎりを食べ始める。

内藤 いただきます。

全員 いただきます。

内藤 きれいな場所ですね。

坂入 前に原さんが教えてくれて。

原 でも私も、坂入さん以外と来たのは初めてです。

坂入 学校の中だけだと暑くもないし寒くもないし、色々鈍ってきちゃうから。

森本 紅葉、きれい。

杉尾 本当に。

宇野 学校からだとあんまり見えないもんですね。

森本、発電所を指差し、

森本 あれ何？

坂入 発電所。

森本 へえ、そんなのあるんだ。

坂入 うん。

森本 いつもあの白い塔だけ見えてて、何だろうって思ってたんだよね。

杉尾 目立つもんですね。

森本 行ってみたいなあ。

原 でもあそこ、普通の人は入れないんだよ。

坂入 この前見に行ってみたけど、大きな門があつてその先には行かれない

かった。

森本 ふーん……。ああ、遊園地とかプールとかデパートとか、誰か作っ

てくれないかなあ……。

杉尾 いいね！

宇野 行ってみたい！

でも、色々ありすぎて、あんまり良いことないよ。

森本 そう？

坂入 そうだよ。ビルばかりで、空の広さなんてここの何分の一かし

か無いし、ここでこうやっておにぎり食べて、美味しいって感じるの

も、きつとこの空とか、空気とかのおかげだよ。

森本 うーん。

坂入 だいたい、別に同じ服屋とかコンビニがいくつあつても仕方ないし、

ネオンばかり光ったって、どうせ全部ただの電球だよ？

森本 でもなあ……。見たこと無いからわかんないや。

杉・宇 ねー。

坂入 ま、そうか……。

内藤 もー、ないものねだりしててもしょうがないでしょ？せつかく広いところに来たんだし、何かして遊びましょう。
いいですね。

坂入 じゃあ、だるまさんが転んだがいい！

森本 私も。

内藤 じゃあ、それで。じゃんけんで鬼決めましょう。

全員 最初はグー、じゃんけんポン、あいこでしょ！

坂入が負け、鬼になる。

全員で「だるまさんが転んだ」をする。

しかし、気がつくと坂入と原以外そこには誰もいない。

その日の夜、坂入の部屋。

坂入、紙飛行機を折る。

坂入

「Sさま。この前、なんとみんなで学校の外に出かけました。おにぎりを買ってみんなで丘から紅葉を見ました。駅前のコンビニ、おにぎりが二種類しかなくてびっくりしました。でも、とても楽しかったです。内藤さんがしゃけのおにぎりを食べているところを見て、私のお母さんもよくしゃけのおにぎりを食べていたのを思い出しました。思い出す、といえは、Sさんの紙飛行機を見るといつもお父さんのことを思い出します。私のお父さんも、Sさんと同じように紙飛行機を飛ばすのが上手でした。私には何も言わないで突然いなくなってしまったお父さんですが、きつとどこかで元気にしている

ことでしょう。この秋も一瞬で過ぎ去り、もうまもなく冬です。どうか風邪などひかぬよう、お気をつけて。坂入晴子」

坂入、折った紙飛行機をじっと見つめ、

坂入

お父さん……。

坂入、紙飛行機を飛ばす。

合唱の発表の日。

原、教室にひとりで見られ、ピアノで『明日へ』の冒頭を弾こうとするが、あまりうまくいかない。

坂入、あとから教室にやってきて、その様子をそっと伺っている。

原、練習の手を止め振り向くと、坂入がいることに気づき、

原 えっ、あ、

坂入 あ、ごめん、

原 聴いてた・・・？

坂入 ちよつと。

原 絶対誰にも言わないでね。

坂入 恥ずかしいの？

原 だってまだ弾けないもん。

坂入 そりゃ、まだ練習中なんだから仕方ないよ。

原 そうだけど・・・。

坂入 宇野さんに教えてもらったら？

原 えー・・・。

坂入 大丈夫だって、絶対教えてくれるよ。

原 うーん・・・うん。今度、聞いてみる。

坂入 いよいよかー。森本さん、ちゃんと来るかな？

原 来るよ、サボるほうが恥ずかしいでしょ。

坂入 そうだね。

森本、『明日へ』を口ずさみ、譜面を見ながら教室に現れる。

森本 はるかな風をう受け・・・（外れた音程で）て・・・？
原 （正しい音程で）てー。

森本、原に向かつてうなずき、再び歌い始める。
杉尾と宇野、教室に現れる。

杉・宇 おはようございます。

坂入 おはよう。

原 おはよう。

内藤、教室に現われ、

内藤 おはようございます。

全員 おはようございます。

内藤 いよいよ、ですね。

坂入 もう絶対大丈夫だから。

杉・宇 ね！

森本 うん。

原 私と杉尾さんも隣で歌いますから。

森本 うん。

杉尾 音、よく聞いてくださいね。

坂入 後ろの私たちにつられないように。

森本 うん。

内藤 まあ、あとはリラックスして頑張りましょう。じゃあ、肩上げて、

下げて、肩上げて、下げて（全員肩を上げ下げする）。深呼吸（全員深

呼吸）。行きますか。

全員 はい。

宇野はピアノへ、それ以外は合唱の隊形に整列する。
宇野、『明日へ』の伴奏を弾き始める。

合唱が終わり、坂入と原だけになった教室。

坂入

お疲れ様。

原

お疲れ。

坂入

まさか森本さん、あんなに音程直るとは思わなかった。

原

あれは多分、音を聞けてないっていうよりも、音を聞こうとしてなかったんだと思うんだよね。

坂入

あー、なるほど。

原

性格出るのかもね、そういうところ。

坂入

まあ、でも、何とか無事に終わってよかった。

原

私久しぶりだったもん、ちゃんと全員でやったの。

坂入

また、みんなでやれるといいね、今度は違う歌とかも……。

原

……うん。

坂入

できるよ、いつか。

原

うん。

坂入

次みんながいなくなっちゃう前にさ、クリスマス会とかしたくない？

原

うわ、懐かし。

坂入

って言っても、何したら良いのかわかんないけど。

原

プレゼント交換とか？

坂入

ピザとか頼みたい。

原

ピザねー、無いからなあ、ピザ屋さん。

坂入

そっか。

原
いいなあ、東京だったら電話一本であつあつピザ、届くもんねー。

坂入

まあ、ね。

原

はあ……。

坂入

でも、クリスマスの東京なんて、本当に人しくないよ、もう最悪なんだから。

原

キラキラのピカピカで、人だらけ？

坂入

そう、なんかキラキラに集まるって、虫みたい。

原

確かに……ねえ、いつか、その最悪の東京に、私のこと、連れてってくれる？

坂入

……いつかね。

日曜の夜、坂入の部屋。

坂入の頭上を紙飛行機が通り抜け、落ちる。

坂入、それを拾って読み上げる。

坂入

「坂入晴子さま。ずいぶん寒くなりましたがお元気ですか？お出かけ、楽しかったようで何よりです。たくさんお話したいことがあるのですが、今日は大切なことを伝えたいといけません。実は、これがあなたに宛てた最後の手紙になります。どうしてもやらねばならないことが出来ました。本当は全てを救いたい、けれどそれには私の体ひとつでは足りません。大の大人がこんなワガママを、大変恥ずかしい限りですが、大人や子供である前に、あなたも私もひとりの『人』なのです。くれぐれも自分自身を大切に、あなたがこの世界のどこかで、これからも強く生きていくことを信じています。最後まで身勝手に、あなたをまた一人にすることをどうか許して下さい。では、さようなら。Sより」

その時、部屋のドアをノックする音が聞こえる。

坂入

はい……。

坂入、慌てて紙飛行機を隠す。

こっそり訪ねてきたのは内藤である。

内藤

ごめんなさい、こんな時間に。

坂入

ああ、全然。

内藤 他の人の部屋なんて入ったことないから、ちよつと変な感じ。

坂入 ああ、すみません、あんまり綺麗じゃないんですけど、

内藤 そんなことないわよ、大丈夫……。あの、ちよつと変なこと聞いてもいい？

坂入 あ、はい。

内藤 私が突然なくなったたりしたら、みんな迷惑がったりするかしら？

坂入 ……。

内藤 ……ごめんなさい、あの、

坂入 迷惑か、そうじゃないかで言ったら、断然迷惑です。

内藤 そうよね……。

坂入 迷惑っていうか、寂しい。でも、ちゃんと理由がわかれば、寂しくないかもしれないです。例えば、仕事に出かけるっていうのがわかっていたら、「いってらっしゃい」って言えるじゃないですか。

内藤 そうね。

坂入 何のためにいなくなったかわからないのが、一番どうしたらいいかわからない、と思います。でも、いなくなっちゃったら迷惑かけたかどうかともわからないんだから、そんなの気にしないでいいんですよ。でも、気になっちゃって。

内藤 私の父が言ってましたよ、「自分自身を大切に」って。父も母も、自分の信念に正直な人だったんで。だから、私のことを置いて出ていったのも、きっと覚悟を持って、自分自身を大切にしたらからなんです。

内藤 覚悟ね……。

坂入 だから、ある日ひよっこり帰ってきたりしちゃダメですよ、びっくりしちゃうから。

内藤 そうね。もう忘れられるくらい、ちゃんといなくならないと。

坂入 まあ、忘れるなんてなかなか出来ないんですけどね。だから、全部

忘れられる人達がちよつと羨ましいです。

内藤 ありがたい。あの、ここに来たことは内緒にしてね。

坂入 もちろん、もう消灯時間とつくに過ぎてますしね。

内藤 じゃあ、おやすみなさい。

坂入 あ、あの、

内藤 ん？

坂入 あ、えっと、しゃけのおにぎり好きですか？

内藤 何それ、でも一番好きよ、おにぎりの中で。

坂入 ……よかったです。

内藤 じゃあ、おやすみ。

坂入 窓の外、内藤さんの最後の思いを乗せた紙飛行機は、まるで彼女の

手を引くように、まっすぐ遠くへ飛んでいきました。私が見た中で、

一番きれいな飛び方でした。でも、この先私は何度紙飛行機を飛ば

しても、もう誰にも届きません。どんなにきれいに折っても、どんな

にきれいに飛ばしても、私の「さようなら」や「いつてらっしやい」

は、もうこの部屋からは出られません。ここには、ベッド、机、電子

レンジ、冷蔵庫、お風呂とトイレがあります。壁も床も真っ白、見渡

す限り冷ややかに広がっていて、少し目が痛くなりそうです。それか

ら、この町には小さな商店と郵便局があつて、あとコンビニ、でも

夜の8時には閉まります。というか、どのお店も早くに閉まってしま

うので、夜の町はきつと真っ暗。それから、

回想。

原 あれは発電所。

坂入 そんなのあるんだ。

原 あの山一個、発電所なの。

坂入 でかい……。

原 私の親、あそこで働いてるの。

坂入 あ、だからここに？

原 よくわかんないけど、忙しいからじゃない？別に一緒に住んでたっ

て、そんなに迷惑かけませんけど、っていう。何が忙しいのかも

よく分かんないし。

坂入 まあ、親の仕事細かくわかる子供なんて、そんなにいないよ。

坂入 坂入さん家は？

原 私の家？

坂入 そう。

坂入 私のお母さんは何かを研究してたんだけど、いなくなっちゃって、

お父さんは飛行機作ってたんだけど、いなくなっちゃって。

いなくなりましたよ。

坂入 いや、本当に。だから最後はおばあちゃんと住んでた。

原 へえ。

坂入 ……あの、煙突2本あるのに1本しか使ってないの？

原 ああ、煙？

坂入 うん、出てないから。

原 ああ……たまに使ってみただけど、電気足りない時とか？

坂入 なるほど。

原 この町じゃクリスマスとか全然関係ないけど、東京とか、すごい

でしょ？

坂入 まあ、そうだね。作ってるのはこっちで、使うのは向こうっていう。

坂入 うん。

原 何なんだろうね。

坂入 でも確かに夏のある日、山の上にある発電所の、もうひとつの塔から

煙がでて、煙は細く長く、昼と夜の境目の空に消えて行きました。

校庭にある幅跳び用の砂場では、原さんがお線香を焚いていて、ずい

ぶん遠くからでもわかるその香りは、おばあちゃんとお別れした

あの朝を思い出します。あの朝、私は迎えに来た真っ黒い車に乗っ

て、この学校へ来ました。私が家を出るとき、一緒に住んでいたおば

あちゃんは仏壇に手を合わせ、私には何も言わずにお線香をじっと

見ていました。だから、この何もない部屋でも、お線香の香りや、

お弁当の香りや、ずっと遠くの金木犀の香りや、一人分のご飯、一人

分のお味噌汁、一人分のおかずの香りがするような、そんな気が

します。

回想。

坂入 ねえ、お母さん、

母 なに？

坂入 学校で、親の仕事について聞いてきてって言われたんだけど。

母 ああ、私のお仕事は、ちよっと教えてあげられないのよね。

坂入 そうだよね……。

母 じゃあ、人のことを研究しています、っていうことにしておいて

くれるかしら。

坂入 わかった。あと、来月の体育祭なんだけど、

母 ああ、ごめんなさい、私やっぱり行かれそうにないの。

坂入 あ、全然いいよ。

母 いまやってる研究が一段落するまでは休めなくて。お父さんに代わ

りにいつてもらうから。

坂入 うん、ありがとう。

母 ごめんね。

坂入 内藤さんに似てるお母さん、お母さんに似てる内藤さん、お父さんは

いつも仕事熱心なお母さんを大切にしていました。だから、私が

ご飯を食べるときはいつも一人で、

回想。

内藤 何味にしますか？

森本 (杉尾)おおか、(宇野)おおか、(坂入)しゃけ、(原)おおか、

(内藤)内藤さんはしゃけ。しゃけとおおかしか売ってないってど

ういうこと……。

杉・宇 確かに。

坂入 でも私は、しゃけかおおかだけで十分でした。

どこからともなく「だるまさんが転んだ」の掛け声が聞こえる。

クリスマス。
教室には誰もいない。

灰のような雪の降る校庭の砂場。
坂入と原、お線香をあげる。
坂入、ポケットからハサミを取り出し、自分の三つ編みを切る。

坂入　メリークリスマス……あれ？

ひとまず椅子に座って待っていると、原が教室に駆け込んでくる。

無断複製・転写を禁じます。

作品に関するお問い合わせ、上演許可等につきましては、カミグセ
(info@kamiguse.com)までお問い合わせください。

原　坂入さん！

坂入　原さんおはよう、

原　内藤さん、聞いた？

坂入　えっ？

原　いなくなっちゃったって。先生たちが探してる。

坂入　あ、ああ……。

原　何？

坂入　……また置いて行かれちゃった。

原　……。

坂入　ごめん。他の人は？

原　……。

坂入　そっか……。

原　……。

坂入　原さん、お線香あげに行く？

原　ああ、うん。

坂入　私も行つていい？

原　うん。